

土 淨



天香堂

三月號

民國二十五年五月廿五日創刊
第一卷第一期
第二卷第一期
第三卷第一期
第四卷第一期
第五卷第一期
第六卷第一期
第七卷第一期
第八卷第一期
第九卷第一期
第十卷第一期
第十一卷第一期
第十二卷第一期
第十三卷第一期
第十四卷第一期
第十五卷第一期
第十六卷第一期
第十七卷第一期
第十八卷第一期
第十九卷第一期
第二十卷第一期
第二十一卷第一期
第二十二卷第一期
第二十三卷第一期
第二十四卷第一期
第二十五卷第一期
第二十六卷第一期
第二十七卷第一期
第二十八卷第一期
第二十九卷第一期
第三十卷第一期
第三十一卷第一期
第三十二卷第一期
第三十三卷第一期
第三十四卷第一期
第三十五卷第一期
第三十六卷第一期
第三十七卷第一期
第三十八卷第一期
第三十九卷第一期
第四十卷第一期
第四十一卷第一期
第四十二卷第一期
第四十三卷第一期
第四十四卷第一期
第四十五卷第一期
第四十六卷第一期
第四十七卷第一期
第四十八卷第一期
第四十九卷第一期
第五十卷第一期
第五十一卷第一期
第五十二卷第一期
第五十三卷第一期
第五十四卷第一期
第五十五卷第一期
第五十六卷第一期
第五十七卷第一期
第五十八卷第一期
第五十九卷第一期
第六十卷第一期
第六十一卷第一期
第六十二卷第一期
第六十三卷第一期
第六十四卷第一期
第六十五卷第一期
第六十六卷第一期
第六十七卷第一期
第六十八卷第一期
第六十九卷第一期
第七十卷第一期
第七十一卷第一期
第七十二卷第一期
第七十三卷第一期
第七十四卷第一期
第七十五卷第一期
第七十六卷第一期
第七十七卷第一期
第七十八卷第一期
第七十九卷第一期
第八十卷第一期
第八十一卷第一期
第八十二卷第一期
第八十三卷第一期
第八十四卷第一期
第八十五卷第一期
第八十六卷第一期
第八十七卷第一期
第八十八卷第一期
第八十九卷第一期
第九十卷第一期
第九十一卷第一期
第九十二卷第一期
第九十三卷第一期
第九十四卷第一期
第九十五卷第一期
第九十六卷第一期
第九十七卷第一期
第九十八卷第一期
第九十九卷第一期
第一百卷第一期

第二十五卷

第三

御歌

よしあしと

思ふ心を

さしおきて

彌陀の誓を

たのむべきなり

目次

巻頭言……………(1)

お彼岸會を活かしたい……………石橋誠道(2)

―病床にある人々への説教講話―

轉重輕受……………藤井實應(6)

先祖の有り難さと如來様の有り難さ

……………吉水辨道(10)

滯印日記(三)……………春日井眞也(14)

エゾ高僧の觀化和譚……………須藤隆仙(18)

信生法師旅日記(上)……………鶴田湛泉(25)

淨土に生きる道……………佐藤賢順(29)

觀無量壽經講話(その三)

永遠の今をみつめて……………宮林昭彦(21)

隨想増上寺の三門……………村上博了(23)

卷頭言

萌え出でる春のひかりがまばゆい。はちきれる若さで若者がスポーツにうちこんでいる。美しい。しかし、一方、青少年の犯罪がいかに多く、そして、はげしいすがたのものが目につくことか。社會が健全に歩んで行くことを私は信ずる。しかし、その蔭に人間と共に生れ、人間と共に歩んできた犯罪も決して跡を絶たない。この人間のひづみは道德によるか、宗教の力によるほか道がない。もちろん、合理的な社會の建設によつてかなりの犯罪は減じよう。が、人間の「業」に迄深く、結びついている犯罪は、單なる社會の革命や改良によつては根絶しない。

「わたしは小さい頃、よくおちいさんやおばあさんとお寺へおまいりにきました。」といふことばをよくきいた。一時代前迄は、少年も佛教の「ふんいき」のなかにいた。近來は「こども會」も宗教家の手を離れがちだ。青少年を宗教の「ふんいき」のうちに再びもどそう。家庭も、社會も、もつと宗教を重んずる空氣をつくろう。

それには、宗教のうちがわのものが、時代の空氣にふさわしい明るい宗教的「ふんいき」を創意によつてかもし出すことに眞剣にならなければならない。社會も本氣で犯罪の少い健全な國はどのようなにして建設されるかを考えなくてはならない。

道德教育も宗教教育も今日程、その影のうすくなつた時代はめずらしいのではないか。識者が、とまどつてゐるかたちだ。原子革命による社會的變貌がきかかつてゐる現在、無理のないことかも知れないが、それではならないのではないか。宗教や、道德のもつ「座」は人類と共にゆらぎのないものであることを信じたい。(佐藤良智)

お彼岸會を活かしたい



石 橋 誠 道

暑いも寒いも彼岸から彼岸までと言はれておるように、この彼岸は實に氣候のよい時である。このよい時を特に選んで彼岸會を勤めることは最も當を得たものである。佛教が特にこのよい時を選んで年中行事としてそれが今日まで行はれて一種の習慣ともなつたことは、佛教徒として非常に有利なことであり、大に悦ばねばならぬ。これは又先徳の餘澤として感謝せねばならぬ。だから今後は益々之を活かすことに努力して教化に發展に之を利用してゆかなくてはならない。由來佛教各宗は進取的精神が乏しくなつておる。これは多年有力者の保護を受け、檀信徒の應援を得た爲に、小生に安する習慣がついて、進取發展の精神が乏しくなつた結果だと思はれる。即ち熱がなくなつてしまつたのである。昔の玄奘三藏が死を決して印度を旅行し、鑑真和尚が目がつぶれてもなを屈せずして我國に渡來して布教傳道したような氣概が全くなくなつたのである。これでは信者が付いて來ない、應援者が現はれる筈がない。これでは自然に佛教がおとろえる。もつともつと努力しなくてはならぬ、發憤しなくてはならぬ。特に青年佛教徒は大にこの點に注意し今後は振立たねばならぬ。更らに檀信徒のみなさんも大に協力應援してもらいたい、そうしてこの貴い佛教、雙びなき尊い教え、佛の限りなき大慈悲を普く萬人に頂かせてもらいたいと思う

病床にある人々への説教講話

—その一—

轉 重 輕 受



藤 井 實 應

みなさん、どうぞお樂にして聞いて下さい。本日はまた當院の〇〇先生の御懇切なお世話で、みなさんとお話しある機會が與えられましたことゝ存じます。きょうは法然上人さまのみ教を味わして頂きたいと思います。みなさんも御承知の通り、法然上人は日本佛教の創始者といわれ、念佛の元祖と仰がれています。(昭和三十六年が七百五十回忌に正當) 今日、念佛宗といわれる淨土宗、眞宗、時宗などみな法然上人のみ教が元になつておるのであります。平安末期から鎌倉の初期に當り、新しい日本的な佛教が興隆しましたが、その尖頭に立つて念佛の法門を打ち建てられました、どんな愚かなものも、罪深いものも、貧しいものも、弱いものも、苦しみ悩むものも、南無阿彌

陀佛によつて明るく、力強く、現在から未來永遠に生きる事ができるというみ教をお説き下されたのであります

した。上人の御見舞が恰度熱の下ろうとする頃であつたかも知れませんが、しかし彼の一番心にかゝつていたのは、もし一のことがあつたら父や母はどうなるだろうかということ、それがためいろ／＼心を煩せ惱んでいたのであります。辨榮上人のお見舞の御言葉はその悩みを解かしてくれました。生死ともに阿彌陀まかせの安らかな心境が開けた、その心境が病氣にどんなに大きなよい影響を與えたかはいうまでもないことであります。健康に復した彼は、熱心な傳道者となりました。

私はあるところで、足が不自由で、その上長くは座つておれないほど衰弱しておられた某婦人から、いろいろ信仰上の相談をうけ、一時間近くいろいろと信仰のことを語りあいました。その話の中に私は右の辨榮上人のお話をしました、そしてそのお見舞のお言葉を取次ぎました。その御婦人は、萬一のことがあれば子供たちはどうなるだろうと、御子さんのことを氣に惱んでおられたのでした、それで「あなたも阿彌陀まかせ、お子さんも阿彌陀まかせ、阿彌陀如来がよいようにお導き下さいますよ」とお話申したことでした。たいへんおよろこび下されて、それから急に御元氣になられ、今も「阿彌陀如来がよいように御導き下さるから」と御念佛申しては元氣に明るくお暮しであります。

轉重輕受と仰せになつた法然上人の御言葉は、これらの人によつてまのあたり教えられるのであります。されば法然上人は右のお言葉をむすんで

「されば念佛を信する人は、たとひいかなるやまひをうくれども、みな宿業なり、これより

病床にある人人への説教講話

—その二—

先祖の有り難さと

如來様の有り難さ

吉 水 辨 道

先年、私が、仙臺の布教にまいりました時、Dというお寺へ御厄介になつた事がありますが、其のお寺に、Eさんという檀家總代の方が居られて——お歳はもう七十以上で頭の毛も鬚も、まつ白のお方でしたが、私に、こういう事を尋ねるのです。

わしは、若い頃、政治が好きで、つまり政治狂という奴で、此の歳になるまで、政治運動に没頭して來たため、七十になつても、つい御寺詣り一つしなかつた有様です。誠に恥しい話ですが、最近、檀家總代という役を仰せ付かつて、御寺へはまいりますが、宗教の事は何にも分りませ

ん、佛様の有り難いという事も實は知りません。只然し、御先祖の有り難い事は私にもよう分ります。そこで、今日は一つ、佛様の有り難いわけの分るよう、とくと御指導にあづかりたいものですが、というのです。

私はしばらく、此のEさんの顔を見詰めて居りましたが、

Eさん、貴方そりや本氣で仰有るのかな、という、勿論本氣ですとも、何で、わしが、冗談ごとに此の様な事をお尋ねいたしましょう、という。

左様か、貴方が本氣なら申しあげて見ましようが、佛教

エゾ高僧の觀化和譚



須藤 隆 仙

北海道の有珠^{ウス}という處にある善光寺なる淨宗寺は、慈覺大師に縁を求める北海道の古刹で、歴史も古く寶物としての貴重品も多く、道文化史の上に大きな一つの立場をもっている寺である。

この寺が慈覺大師造いかなくとも、とにかく相當に古い寺であることは、新羅の記録とか福山秘府といつた如き北海道の古文献に「慶長十八年（A D 一六一三）に松前家五代領主慶公侯が善光寺を再建した」と記されていることから推考されるが、特にこの寺は單に古いということ丈でなしに、文化元年（A D 一八〇四）幕府がエゾ地を直轄するに當り、エゾ地に三つの官寺を設け、善光寺もその一つに加えられたのである。當時の官寺というのは大したものであつて、善光寺は境内地四萬八千坪を賜り、米百俵、金四十八兩、十二人扶持の祿を受けたのである。

住職は幕命により江戸で任命され、初代莊海上人、二代覺

洲上人、三代辨瑞上人、等、當時の淨宗高僧が赴任している。

信生法師旅日記

(上)



鶴田湛泉

△▽

鎌倉に稀れなる大雪が二尺も降り積つた承久元年正月廿七日の雪月夜、大臣拜賀の式を終えた將軍實朝は、公曉のために討たれて、鶴岡八幡の社頭の雪を鮮血アサに染めた。

その翌日には、實朝夫人は落飾され、將軍の恩顧を受けた武藏守親廣初め御家人百餘名は、哀惜の餘り出家を遂げてしまつた。

武藏守等と共に出家するものと思はれていた鹽谷五郎兵衛尉朝業という武士がいた。實朝の側近に仕へて日頃寵愛を受けていながら出家しなかつたのは何故かと、いぶかしく思はれているうち數日後のこと、數人の郎黨を引きつれて悄然と鎌倉を去つて行つた。彼の行爲はます／＼人々の疑惑を招くことゝなつた。

朝業が出家を躊躇チウヂロしたのは、子供への強い愛情にひかれたからであつた。

